帰りたくなる場所

第 13 期　小黒 祐貴

1 月 16 日の本ゼミをもって，私達第 13 期生の 2 年間のゼミ活動に終止符が打たれた。この 2 年間，私達は普通の学生では経験できないようなことをたくさん経験してきた。KUBIC，読売新聞マケコン，神戸マケコン…。幸運なことに，この 2 年間でゼミ全体として，多くの成果を上げることが出来た。私自身，小野ゼミに入り，代表を務め，国際学会で自分達の研究を発表するという経験までも積むことができたが，これらの経験を積むことができるなど、ゼミ選びを始めたばかりの頃の私は，つゆも想像していなかったことであろう。しかし，これらの成果を上げるまでの過程は，決して順風満帆と言えるものではなかった。徹夜が何日も続いたり，研究の壁にぶち当たったりして，途中で挫折しそうになることが何度もあった。そんな中でも，最後までやり遂げ，成果を上げることができたのは，素晴らしい同期，先輩，そして先生に恵まれたからであろう。つまり，この小野ゼミという最高の環境であったからこそ，粘り強く活動に取り組むことができたのだと思う。

今までの人生を振り返ると，私は物事を途中で投げ出すことが多く，1 つの事を続けられない人間であった。たくさんの習い事を経験して，様々な組織に所属したが，当時の私は，一度失敗したらすぐに辞めてしまう性格であったため，長続きしないものばかりであった。そんな自分にとって，小野ゼミは，唯一最後まで続けられた活動であるし，今までこんなにも 1 つの組織にコミットし，生活を費やしたことは無かった。このように心血を注いでゼミ活動に取り組んだからか，小野ゼミへの愛もこの上なく高まった。そうして，私にとって初めて，心の拠り所となるような組織が出来た。

ゼミを引退した次の日，私は久しぶりの休日をどのように過ごそうかと考えていた。一日中寝ることや，映画を観ることなど選択肢はたくさんあったはずだが，無意識の内に私は日吉キャンパスへと足を進めていた。そう，小野ゼミの入ゼミ説明会の手伝いに向かっていたのである。ゼミ活動から離れた私は，1 日も経たない内にゼミが恋しくなり，またゼミに戻り，活動に参加していたのである。

今の私には，仕事に追われて忙しい中でも，小野ゼミの飲み会に遊びに来てくださる OB･OG の方々の気持ちがよく分かる。それは，実家を離れ，遠い地で暮らす人が，思い出深い故郷での暮らしにノスタルジーを覚え，帰郷したくなる気持ちと同じであろう。私はこの 22 年の歳月を経て，ようやく小野ゼミという居場所を見つけることができた。小野ゼミでの活動から学業面など様々な恩恵を受けたが，私にとって一番の恩恵は，帰りたいと思えるような心の拠り所となる場所を提供してくれたことだと思う。これからも時々，小野ゼミという名の故郷に帰り，新たな歴史を築き上げる後輩たちとお酒を酌み交わし，彼らの活躍を聞きながら，現役時代の思い出に浸ることができたなら，この上なく幸せであろう。